

# **The Use of Subtitle Translation in Language Education -As Conducted in a Chinese-Japanese Translation Class Offered by the Department of Applied Japanese-**

**Watanabe, Hiroaki**

Adjunct Instructor, Department of Applied Japanese,  
Chihlee University of Technology

## **Abstract**

Subtitle translation plays an important role as a tool that allows us to overcome language barriers and access content from other cultures. With the spread of Netflix and other video streaming services that provide viewers with easy access to various content from around the world, the significance of subtitle translation has perhaps never been greater.

Video streaming services allow viewers to set subtitles in their preferred language, making them a helpful tool for learners of foreign languages; in fact, subtitles are often used by language instructors as teaching material. This study aims to explore the use of subtitle translation in language education by examining the benefits of subtitle translation for university students.

Students were first asked to translate subtitles individually using a step-by-step approach, a method which proved to promote self-motivated learning. Next, students worked in groups to complete the final draft of their translation. Through active group discussion, students were able to gain a deeper understanding of linguistic and cultural differences. Though the class took place over a span of only two weeks, a majority of the students showed great interest in subtitle translation, leading to the conclusion that subtitle translation can be used as an effective tool in language education.

**Keywords: Subtitle Translation, Language Education, Translation Process**

## はじめに

字幕翻訳は、多くの人々がことばの壁を越え、異なる文化や言語を楽しむための手段として重要な役割を担っている。Netflix(ネットフリックス)をはじめとする動画配信サービスが広く普及した昨今、以前にもまして海外の映画やドラマ、アニメなど、さまざまなジャンルのコンテンツが手軽に楽しめるようになり、それに伴い字幕翻訳<sup>12</sup>の重要性も増している。

動画配信サービスでは、視聴者が必要に応じて字幕を表示したり、言語を選択したりできる。そのため、語学学習にとって有益なツールになり得るだけでなく、教育用の教材としても活用できるだろう。

そこで、筆者は外国語教育における字幕翻訳の活用というテーマに焦点を当て、日中翻訳<sup>13</sup>の授業に字幕翻訳を取り入れてみた。本論は、本学応用日本語学科での実践事例を通じて、翻訳授業における字幕翻訳の活用方法を紹介し、その意義と今後の課題について考察したものである。

また、字幕翻訳を授業に取り入れた目的は、翻訳スキルの習得に加え、課題に取り組む過程で、学習者に自ら言語や文化の違いを認識・理解してもらうことにある。

## 字幕翻訳とは

視聴覚翻訳の一つである「字幕翻訳」は、「言語内字幕」と「言語間字幕」に分けられる。「言語内字幕」とは、起点テキストのセリフ(音声)を同じ言語内で文字化するもので、日本語なら日本語の中で言い換えるものを指す。これは主に聴覚障害者のための字幕として役立っている。一方、「言語間字幕」とは、起点テキストのセリフ(音声)を目標テキストで文字化するもので、例えば、中国語から日本語に言い換えるものである。

本論では、中日翻訳の授業における字幕翻訳の活用とその実践事例を紹介するため、「言語間字幕」のみを対象とし、それを「字幕翻訳」と呼ぶ。

字幕翻訳は、文書の翻訳に比べ多くの制約が存在し、翻訳者はこれらの制約のもとで訳文を完成させる必要がある。

字幕翻訳の制約については、Hatim & Mason(1997: 65-66)が、①「音声言語(speech)から文字(writing)への変換に伴う制約」、②「字数制限や時間制限などの物理的制約」、③「②の結果による起点テキストの内容の圧縮」、④「映像との整合性の要求」の4点を挙げている。

ちなみに、②の物理的制約に関して、日本語字幕では通常、「1秒間に4文字」という時間的制約と、「1行につき13文字まで、最大2行まで」という空間的制約が設けられている。

これらの制約のもとで訳出された内容は通常、圧縮されたものとなる。ただ、これはセリフの要素を切り捨てるということではなく、内容を「圧縮」<sup>14</sup>する、つまり、起点テキストの意味やメッセージをよく理解し、伝えようとしている内容を凝縮して訳すということである。そのため、たとえ文字数が減っても、意味や情報量は変わらない。これが字幕翻訳と向き合う上で大切な考え方の一つである。

このように字幕翻訳者は、これらの厳しい制約に従いながら、さらにコンテンツの制作関係者やエージェントからの要求にも応じつつ、視聴者に最高の試験体験を提供すべく、いわゆる「わかりやすい」訳文を完成させるのである。

## 字幕翻訳作業における訳出プロセス

字幕翻訳では、起点テキストのセリフを忠実に訳すというよりは、内容の意味やメッセージをよく理解し、それをわかりやすく伝えることが大切である。しかし、厳しい制約のもとで訳出を行うため、どうしても起点テキストと目標テキストの間に「差」が生まれてしまう。そこで、筆者はその「差」に注目

<sup>12</sup> 動画配信サービスでは、一般的に字幕翻訳以外に、吹き替え、SDH(聴覚障害者用字幕)も提供されている。なお、本論では字幕翻訳のみを扱う。

<sup>13</sup> 本学での科目名「中日筆譯」を日本語に訳したものである。なお、本論における中国語とは台湾で広く使用されている中華民国国語を指し、「台湾華語」と呼ばれるものである。

<sup>14</sup> 「圧縮」はGottlieb(1992)によって提唱された10種類の字幕翻訳ストラテジーの一つである。10種類のストラテジーとは、①Expansion(拡張)、②Paraphrase(言い換え)、③Transfer(転移)、④Imitation(模倣、模写)、⑤Transcription(複写)、⑥Dislocation(変換)、⑦Condensation(圧縮)、⑧Decimation(簡素化)、⑨Deletion(削除)、⑩Resignation(放棄)である。

し、授業での字幕翻訳作業に「訳出プロセス」を取り入れてみた。

山田・豊倉・大西(2018)によれば、訳出プロセスには2つの段階がある。一つは、起点テキストの字義的意味を回復するだけの「浅い処理」で、もう一つは、訳文の情報量を調節したり、訳文を修正・編集したりする「深い処理」である。また、このプロセスにおける訳語の変化を「〈起点テキスト〉→〈リテラル訳〉→〈字幕訳〉」としている。リテラル訳とは「浅い処理」による直訳的な訳語で、字幕訳とは「深い処理」による意識的な訳語である。この訳語の変化を例とともに示したものが以下である。なお、リテラル訳は筆者によるもので、字幕訳は Netflix からのものである。

〈起点テキスト〉 我爸、我妈、我哥、我姐都在

〈リテラル訳〉 父も母も兄も姉もみんな生きているけど

〈字幕訳〉 両親も兄弟も生きているけど

(『華燈初上』第3部第21集)

リテラル訳と字幕訳を比較すると、リテラル訳の「父も母も」「兄も姉も」が、字幕訳では「両親も」「兄弟も」と圧縮され、「みんな」は削除されているのがわかる。

## 応用日本語学科の「中日翻訳」授業

筆者の担当した中日翻訳の授業は、学部3年次生以上を対象にした応用日本語学科の選択科目(18週/50分2コマ)で、上学期の日中翻訳(主に台湾籍教師が担当)に続く科目である。毎年、下学期に2クラス開講され、履修者数は1クラス30~40人で、ほぼ全員が中国語母語話者である。

ちなみに、本学科が開設している通訳・翻訳関連の科目は、3年次の「日中筆譯(日中翻訳)」「中日筆譯(中日翻訳)」、4年次の「日語口譯入門(日本語通訳入門)」「商貿翻譯實務(ビジネス翻訳実務)」「口譯實務演練(通訳実務演習)」の全5科目で、いずれも選択科目である。

以下、中日翻訳の教学目标を4点にまとめたものである。

- 日本語文法能力、文章構成力、日本語読解力の強化。
- 異なったタイプの文章翻訳を通じ、中国語表現力を高め、日本・台湾間の言語と文化の差異を理解すること。
- 視野を広げ、各領域のテーマに関心を持つ態度を養うこと。
- 翻訳の課題をチームごとに完成させ、チームワークやコミュニケーション能力を高めること。

主に日本語能力の強化や文化理解を含むコミュニケーションスキルの向上に主眼を置いていることがわかる。

また、本学科が実践力を重視した語学教育を目標としている点を考慮し、筆者は学生らに翻訳の実践を体験してもらうという目的で、できるだけ生教材を用いて翻訳演習を行った。授業で実際に扱ったものは、新聞や雑誌記事、映画やアニメ、メニュー、商品紹介、視察の日程表、ガイドブックなど多岐にわたる。特にメニュー翻訳に関しては、本学通識学部(教養学部)の協力のもと、教育部の推進する「大学社会責任(University Social Responsibility, USR)実践計画」の一環として、新北市・野柳地区にある11軒の飲食店の協力を得て、日本語版のメニューを作成した<sup>15</sup>。これは後にQRコード読み取り式で公開され、クレジットに翻訳した学生の名前も入れた。その他にも台湾の農作物の紹介、台湾現地視察の日程表、台北MRTご利用ガイドなど、筆者が実際に翻訳した資料も使用した。

## 字幕翻訳の導入と活用、分析

本学科では字幕翻訳に特化した授業は開設されていない。しかし、学生からの要望も多く、また将来の職業選択の一つとして紹介する意味合いも兼ね、18週間ある授業のうち2週間(2回分)を字幕翻訳の授業に当てた。わずか2週間の授業という時間的な制限もあり、字幕翻訳の実践的スキルを習得するというよりは、広い意味での外国語教育の一環と捉え、課題に取り組みながら、学習者の日本語能力およびコミュニケーション能力の向上を目指した。そのため、「ハコ書き<sup>16</sup>」

<sup>15</sup> 詳しくは、津田・渡邊(2023)「応用日本語学科におけるUSR計画の実践と課題」(2023年12月発表予定)を参照。

<sup>16</sup> セリフに合わせて字幕の切れ目を決める作業。

や「スポッティング<sup>17</sup>」、字幕の書き方に関する細かいルールの説明、映像に字幕を入れ込む作業などは行っていない。

まず、1週目は、字幕翻訳の概要として、字幕翻訳の特徴や字幕翻訳ストラテジーについて実際の映像とともに簡単に紹介した。

2週目は、前述の訳出プロセスを使用し、実際に字幕翻訳に取り掛かった。まず、リテラル訳では、語彙や表現の意味(字義的)、文法や文型(言語的)を確認するという目的で、個人で翻訳作業を行ってもらった。皆がリテラル訳を完成させたあとで、まず、起点テキストの文化的要素に関する目標言語圏(日本)での認知度などについてクラス全体で討論した。

その後、字幕訳はチームで取り組んでもらった。字幕訳は、字幕の制約に合わせて、訳文を修正・編集する必要があるため、皆で言語や文化に関する知識を共有し、複数の視点からアプローチしたほうが、より豊かで多様な訳文が生まれるのではないかと考えたためである。また、学生の日本語能力のレベルにもかなりばらつきがあったため、チーム作業を通じて互いに協力し合うことも期待した。字幕訳が完成したあとで、字幕訳とその字幕訳を完成させた経緯について発表してもらった。作業全体の流れをまとめると以下の通りである。

〈起点テキスト〉→〈リテラル訳〉→チーム討論→〈字幕訳〉→発表

以下、学生らのリテラル訳と字幕訳の一例である。

〈起点テキスト〉

我哥台大，我姐北一女

〈リテラル訳〉(一部)

- ① 兄は台大 姉は北一女
- ② 兄は台湾大学 姉は北一女高校
- ③ 兄は国立台湾大学 姉は台北私立第一女子高校

〈字幕訳〉

- ① 兄は台大 姉は名門女子校
- ② 兄は台湾大学 姉はトップ女子校
- ③ 兄は台大卒 姉はトップ校卒
- ④ 兄は国立大学 姉はトップ高校
- ⑤ 兄も姉も勉強ができた
- ⑥ 兄も姉もエリートなのに

⑦ 兄弟は皆優秀なのに

⑧ 兄も姉も高学歴で優秀なのに(Netflixの字幕訳)

(『華燈初上』第3部第21集)

まず、起点テキストについて考えてみる。「台大」とは、台湾の最高学府である「国立台湾大学(国立臺灣大學)」の略称で、日本でもある程度認識されているかもしれない。「北一女」とは「台北市立第一女子高等学校(臺北市立第一女子高級中學)」のことで、台湾では「北一女」という通称で親しまれており、誰もが知る進学校である。ただ、日本人にはあまり馴染みのない名称かもしれない。

次に、訳語を見てみると、リテラル訳では、家族の呼称は「兄」「姉」で統一されており、学校名はそのまま、または正式名称かそれに近いかたちのものとなった。

続けて、字幕訳を見てみると、チームごとに訳文が工夫されており、面白く仕上がった。家族の呼称は⑦のチームのみが「兄弟」とした以外、他は「兄」と「姉」であった。

学校名に関しては、「台大」は「台大」「台湾大学」「国立大学」、「北一女」は「名門女子校」「トップ女子校」「トップ校」など、さまざまな表現が見られた。「国立大学」(④)と訳した理由は、一般的に「国立大学」は日本でも台湾でも優秀だと思われるからという理由だった。「北一女」に関しては、日本のニュースでどのように紹介されているかを調べ、そこからヒントを得て訳したとのことだった。⑤、⑥、⑦のチームは学校名を省略し、「勉強ができた」「エリートなのに」「優秀なのに」と意識的に翻訳したのは興味深い。

このほか、③のチームは卒業を意味する「学校名+卒」とし、卒業したことを強調した。また、⑥、⑦のチームが文末に逆説表現「のに」をつけたのは、次に続くセリフが、「就我最遜(私だけ落ちこぼれ)」だったからである。

表1は、学生およびNetflixの字幕訳をGottlieb(1992)の翻訳ストラテジーとともにまとめたものである。

<sup>17</sup> 字幕を表示するタイミングと長さを決める作業。

表1 字幕訳と翻訳ストラテジー

呼称	台大	北一女
① 兄は 姉は (転移)	台大 (模倣)	名門女子校 (言い換え)
② 兄は 姉は (転移)	台湾大学 (転移)	トップ女子校 (言い換え)
③ 兄は 姉は (転移)	台大卒 (模倣、拡張)	トップ校卒 (言い換え、拡張)
④ 兄は 姉は (転移)	国立大学 (言い換え)	トップ高校 (言い換え)
⑤ 兄も姉も (転移)	勉強ができた (簡素化)	
⑥ 兄も姉も (転移)	エリートなのに (簡素化)	
⑦ 兄弟は (言い換え)	優秀なのに (簡素化)	
⑧ 兄も姉も (転移)	高学歴で優秀なのに (簡素化)	

字幕翻訳では基本的なルールさえ守られていれば、いずれも「正解」というものはない。翻訳者がいれば、その数だけ訳文がある。学生らの字幕訳を見てみても、それぞれの訳文がバラエティに富んでいることがわかる。この点は非常に興味深かった。

## おわりに

本論では、外国語教育における字幕翻訳の活用というテーマに焦点を当て、実際の授業での実践事例について紹介した。特に、訳出プロセスを用いて2段階に分けて訳文を完成させた作業では、学習者の自発的な学習が確認でき、その効果が示唆された。また、字幕訳を完成させるためのチーム作業では、各自が積極的に討論に参加する様子が見られただけでなく、学習者にとって、訳文をめぐる討論を通じて、言語や文化の違いについて考えるよい機会となった。最終的に多くの学生が字幕翻訳に高い関心を示したこと、中日翻訳の教学目標4点をすべてカバーできたことを考えると、わずか2週間の授業であったが、字幕翻訳を取り入れた意義は十分にあったと判断できる。

今後の課題としては、授業終了後に字幕翻訳の活動に対するアンケート調査を実施し、より客観的なデータを得ることで、字幕翻訳の新たな活用方法を模索できればと考える。本論で紹介した実践事例は一つの試みで、紹介した内容も一部に過ぎなかったが、外国語教育における一提案となれば幸いである。

## 参考文献

- Gottlieb, H. (1992). Subtitling: A new university discipline. In: C. Dollerup & A. Loddegaard (eds.) *Teaching translation and interpreting: Training, talent and experience*, 161-170. Amsterdam: John Benjamins.
- Hatim, B. & Mason, I. (1997). *The Translator as Communicator*, 65-66. London/New York: Routledge.
- 山田優・豊倉省子・大西菜奈美(2018)「翻訳は外国語教育に有効か? ~TILT および翻訳プロセスの脳科学的解明への序章~」『通訳翻訳研究への招待』, 19号, 39-67.

## 映像資料

- 華燈初上 第3部: 第21集 Netflix. 2022-3-18 (Netflix)

## 作者簡歷

姓 名 : 渡邊裕朗 / Watanabe Hiroaki  
現 職 : 致理科技大學應用日語系兼任講師  
學 歷 : 首爾外國語大學院大學(韓國)韓日翻譯碩士  
經 驗 : 2020.09-至今 致理科技大學應用日語系專任講師  
2017.09-2020.08 致理科技大學應用日語系兼任講師  
2013.03-2015.02 仁川敬仁女子大學 旅遊日語系客座教授  
2008.03-2013.02 韓國東豆川外國語高中專任日文教師  
研究專長 : 日文教學、韓日/中日翻譯